

国際文化研究科

I 2018年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2018年度大学評価結果総評】(参考)

国際文化研究科における取り組みは、水準評価および達成度評価いずれの観点からもおおむね基準に達していると判断できる。ただし、自己点検・評価シートにおいて十分に説明が記述されていない項目も見受けられるため、次年度は留意いただきたい。

また、国際文化学部との兼任であることによる教員の負担が大きい点には留意すべきである。別部局であることの独立性は保ちつつも、積み上げ方式であることを生かして重複負担のスリム化を目指さなければ、構成員の負担感はさらに増すことになると危惧される。自己点検・評価の作業は、効率化という面からの改善を目指す作業でもあると位置づけてもらいたい。

【2018年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

- ・今年度は、自己点検・評価シートの説明をより丁寧に行うよう心掛けました。
- ・教員の負担の軽減に関しては、即効性のある対策は見出しにくいものの、今年度より導入される「学部生による大学院科目の履修」制度などを通じて、国際文化学部との連携をさらに図ることで改善を目指す努力を行っております。また研究科の具体的な職務内容や教員負担を、学部執行部と共有するなど、全体として担当教員の負担を軽減できるような取り組みを行っております。

II 自己点検・評価

1 教育課程・学習成果

【2019年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

①修士課程においてコースワーク、リサーチワークを適切に組み合わせ、教育を行っていますか。 S A B

※コースワーク、リサーチワークを組み合わせた教育課程の概要を記入。

コースワークについては、「異文化相関関係研究」「多文化共生研究」「多文化情報空間研究」の3つの専門科目群の複数の科目群から、修士論文の場合は30単位以上、リサーチペーパーの場合は34単位以上を取得する(修士論文とリサーチペーパーの最終的な選択時期は予備登録時)。また修士課程1年次には研究科の3つの研究分野の基本文献や研究方法を学ぶ「国際文化研究 A/B」を、2年次には修士論文やリサーチペーパー執筆準備の「国際文化共同研究 A/B」を必ず受講する。リサーチワークについては、修士学位論文提出年度に履修する、「修士論文演習 A/B」で指導教員による論文指導を受けるとともに、副指導教員から随時コメントや助言を求められるようになっている。また全専任教員が参加する7月と11月に開催される論文発表会においてコメントや助言を受ける体制を整えている。

【2018年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

- ・リサーチペーパー審査規程の改定を通じて、2019年度より、以下の通りリサーチペーパーの内容の具体化を図った。
「研究サーベイ論文」: 特定の研究テーマに関する主要な先行研究や関連資料を、論理的かつ体系的に分析したもの。
「提言論文」: 特定の問題や課題に関して、主要な先行研究をふまえた上で、実践的で実行可能な提言を行ったもの。
- ・2019年度より、修士1年次の春学期必修科目「国際文化研究 A」に、修士論文・リサーチペーパーの執筆のための土台作りとして、「リサーチ・デザイン」(トピックの選び方、先行研究分析、リサーチ、タイム・マネジメント、等)、ならびに「研究のための基礎的な方法論」(言説(資料・史料)分析、フィールドワーク、統計調査、等を紹介)を導入した。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・修士論文審査規程
- ・リサーチペーパー審査規程
- ・大学院履修案内
- ・大学院講義概要(シラバス)

②博士後期課程において授業科目を単位化し、修了要件としていますか。 はい いいえ

【根拠資料】※「はい」を選択した場合に単位化及び修了要件として設定されていることが確認できる資料を記入。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

<ul style="list-style-type: none"> ・大学院履修案内 ・大学院講義概要（シラバス） 	
③博士後期課程においてコースワーク、リサーチワークを適切に組み合わせ、教育を行っていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>※コースワーク、リサーチワークを組み合わせさせた教育課程の概要を記入。</p> <p>2017年度入学生から、コースワークの一環として「博士ワークショップ」を導入している。具体的には、「国際文化共同研究」や7月と11月に開催される論文発表会で、修士課程の学生の研究に対するコメントを課すことで、異なる研究領域の知見を増やすと同時に、将来教育者となるための能力を育成することが目指されている。リサーチワークとしては「博士論文演習」で主指導教員から博士課程における研究指導を受けるほか、2名の副指導教員から随時コメントや助言を受けることができる。また全専任教員が参加する論文発表会においてコメントや助言を受ける体制を整えている。</p> <p>【2018年度に改善された事項および新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>2019年度入学者から「博士ワークショップ」に、以下の3段階のステップ制を導入し、順次性を持ったコースワークとリサーチワークの体系を導入した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ステップ1：論文プロポーザル 「博士ワークショップ IA・B」 ・ステップ2：先行研究サーベイ報告書 「博士ワークショップ IIA・B」 ・ステップ3：博士論文を構成する章 「博士ワークショップ IIIA・B」 <p>（注：2019年度入学者がいないため、現状ではまだ実施されておられません）</p> <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国際文化研究科博士学位取得のためのガイドライン 	
④専門分野の高度化に対応した教育内容を提供していますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>※学生に提供されている専門分野の高度化に対応した教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。</p> <p>【修士】</p> <p>「異文化相関関係研究」「多文化共生研究」「多文化情報空間研究」の3つの領域の専門科目をほぼ均等に配置し、それぞれの科目を専門とする教員が担当することで、学生の側から見ると1つ1つの科目の専門知識だけでなく、それらをつなぐ学際的な思考を涵養できる編成になっている。</p> <p>【博士】</p> <p>「博士ワークショップ」で課されている研究発表において、「異文化相関関係研究」「多文化共生研究」「多文化情報空間研究」の3つの領域の専門科目を担当する教員より、各教員の専門的知見からのコメントや助言を受けることができる。また「博士論文演習」において、博士課程における研究を進めるために必要な教育を提供している。さらに、副指導教員2名から必要に応じて随時指導や助言を受けられる体制を整えている。</p> <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ナンバリング一覧 ・国際文化研究科修士学位取得のためのガイドライン ・国際文化研究科博士学位取得のためのガイドライン 	
⑤大学院教育のグローバル化推進のための取り組みをしていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>※大学院教育のグローバル化推進のために行っている取り組みの概要を記入。</p> <p>【修士】</p> <p>アカデミックな英語力を養成する科目として「Thesis Writing A/B」と「Oral Presentation」を、アカデミックな日本語力養成のために修士1年次の留学生を対象とする「国際文化研究日本語論文演習 A/B」ならびに修士2年次の留学生を対象とする「国際文化研究日本語論文演習 C」を設置している。</p> <p>【博士】</p> <p>海外での実地視察調査や学会発表、また外国語での論文執筆を推奨・指導している。</p> <p>【2018年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>2019年度より修士2年次の留学生を対象とする「国際文化研究日本語論文演習 C」を開講している。</p> <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新入生オリエンテーション資料 ・大学院講義概要（シラバス） 	
1.2 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

①学生の履修指導を適切に行っていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
※履修指導の体制および方法を記入。	
<p>【修士】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 新入生オリエンテーションで教員が「教員紹介冊子」にもとづき自分の担当科目やを指導可能領域を紹介するなどの履修指導を行っている。また、留学生には「国際文化研究日本語論文演習 A/B/C」、アカデミックな英語力を養成する科目として「Thesis Writing A/B」と「Oral Presentation」の履修勸奨を行っている。 ・ 各学期の最初の授業で履修予定者の関心を確認し、履修指導を行っている。 ・ 学生の自主的な研究会である「ひころく」の場で上級生が履修等に関する助言を行っている。 ・ 必修授業の場で担当教員が相談に基づき助言を行っている。 ・ 主指導教員（ならびに副指導教員）が履修指導を行っている。 	
<p>【博士】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 新入生オリエンテーションでコースワークやリサーチワークに関する履修指導を行っている。 ・ 各学期の最初の授業で履修予定者の関心を確認し、履修指導を行っている。 ・ 学生の自主的な研究会である「ひころく」の場で上級生が履修等に関する助言を行っている。 ・ 主指導教員（ならびに副指導教員）が履修指導を行っている。 	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p>	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 新入生オリエンテーション資料 ・ 教員紹介冊子 	
②研究科（専攻）として研究指導計画を書面で作成し、あらかじめ学生が知ることのできる状態にしていますか。	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> いいえ
<p>※ここでいう「研究指導計画」とは、事務手続きのスケジュールやシラバス等の個別教員の指導計画を指すのではなく、研究科としての研究指導体制及び研究指導スケジュールをまとめたものを指します（学位取得までのロードマップの明示等）。また、「あらかじめ学生が知ることの状態」とは、HP や要項への掲載、ガイダンスでの配布等が考えられます。</p>	
<p>【修士】</p> <p>2018 年度に国際文化研究科修士学位取得のためのガイドラインを作成し、2019 年度オリエンテーションより配布している。</p>	
<p>【博士】</p> <p>2018 年度に国際文化研究科博士学位取得のためのガイドラインを作成し、2019 年度オリエンテーションより配布している。</p>	
<p>【根拠資料】 ※研究指導計画が掲載された文書・冊子等の名称を記入。</p>	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 国際文化研究科修士学位取得のためのガイドライン ・ 国際文化研究科博士学位取得のためのガイドライン 	
③研究指導計画に基づく研究指導、学位論文指導を行っていますか。	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> いいえ
<p>※組織的な研究指導、学位論文指導の概要を記入。</p>	
<p>【修士】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 入試の合否判定に全教員が出席して入学後の留意点を共有している。 ・ 修士 1 年次の必修科目「国際文化研究 A/B」では、国際文化研究に関する修士論文・リサーチペーパーを書いていくための土台としてのリサーチ・デザインや研究の方法論について、専任教員と本研究科で博士課程を修了した兼任教員が指導にあっている。 ・ 修士 2 年次の必修科目「国際文化共同研究 A/B」では、各学生が研究の進捗状況や調査結果を発表し、専任教員ならびに本研究科で博士課程を修了した兼任教員がコメントや助言を行っている。また「博士ワークショップ」を履修している博士課程の学生が、各学生の発表に対してコメントを行うとともに、文書でもコメントのフィードバックを行っている。 ・ 必修科目の担当教員が研究の進捗状況等について懸念点等がある場合は、教授会に報告し共有している。 ・ 7 月の構想発表会と 11 月の中間発表会に全教員が出席し、学生の研究発表に対する質疑やコメントを行っている。また発表会終了後に教員による評価会議を開催し、個々の学生の発表への質疑や意見を出し合い、それをふまえて主指導教員・副指導教員がその後の指導方針を他の教員と共有している。 	
<p>【博士】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 入試の合否判定に全教員が出席して入学後の留意点を共有している。 	

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

<p>[2019年度以前の入学生]</p> <p>全教員が出席する7月の構想発表会もしくは11月の中間発表会で研究発表を行い、教員は研究発表に対する質疑やコメントを行っている。また発表会終了後に教員による評価会議を開催し、個々の学生の発表への質疑や意見を出し合い、それをふまえて主指導教員・副指導教員がその後の指導方針を他の教員と共有している。</p> <p>[2019年度以降の入学生]</p> <p>主指導教員・副指導教員が、「博士ワークショップ」の3つのステップごとの研究課題に関する指導を行うとともに、7月の構想発表会もしくは11月の中間発表会に全教員が出席し、学生の研究課題に関する発表に対して質疑やコメントを行う。また発表会終了後に教員による評価会議を開催し、個々の学生の発表への質疑や意見を出し合い、それをふまえて主指導教員・副指導教員がその後の指導方針を他の教員と共有する。</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・後シラバス（学期終了後に、各教員が担当授業に関して、「曜日・時限・受講者数」「授業概要」「成果・達成度など」「設置科目の研究科全体での位置づけなど」についての問題点・今後の課題などへのご意見」の項目を記入し提出することになっている） ・2018年度第5回教授会資料（「博士ワークショップ」コメント・シート） 	
<p>1.3 成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。</p>	
<p>①成績評価と単位認定の適切性を確認していますか。</p>	<p>S <input checked="" type="checkbox"/> A B</p>
<p>※成績評価と単位認定の確認体制及び方法を記入。</p> <p>【修士】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・成績評価や単位認定に対して学生から問題が指摘された場合は教務委員会で対応する。 ・修士論文及びリサーチペーパーの可否判定と評価については、主査と副査による評価が適切かどうかを専任教員全員で検討している。 <p>【博士】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・成績評価や単位認定に対して学生から問題が指摘された場合は教務委員会で対応する。 ・博士論文の可否判定は、公开发表会及び審査小委員会の結果をもとに教授会（審査委員会）で審議・承認している。 <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各学位論文の審査規程 	
<p>②学位論文審査基準を明らかにし、あらかじめ学生が知ることのできる状態にしていますか。</p>	<p><input checked="" type="checkbox"/> はい いいえ</p>
<p>※学位論文審査基準の名称及び明示方法を記入。</p> <p>【修士】</p> <p>学位論文審査基準の名称：国際文化研究科修士論文規程・リサーチペーパー規程 明示方法：国際文化研究科修士学位取得のためのガイドライン</p> <p>【博士】</p> <p>学位論文審査基準の名称：国際文化研究科博士論文規程 明示方法：国際文化研究科博士学位取得のためのガイドライン</p> <p>【根拠資料】 ※学位論文審査基準にあたる文書の名称を記入。また、冊子等に掲載し公表している場合にはその名称を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各学位論文の審査規程 ・国際文化研究科修士学位取得のためのガイドライン ・国際文化研究科博士学位取得のためのガイドライン 	
<p>③学位授与状況（学位授与者数・学位授与率・学位取得までの年限等）を把握していますか。</p>	<p><input checked="" type="checkbox"/> はい いいえ</p>
<p>※箇条書きで記入※データの把握主体・把握方法、データの種類等を記入。</p> <p>研究科執行部が大学院課よりこれまでの学位授与者のデータを入手し把握している。</p> <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特になし 	
<p>④学位の水準を保つための取り組みを行っていますか。</p>	<p><input checked="" type="checkbox"/> S A B</p>
<p>※取り組み概要を記入。</p> <p>【修士】</p> <p>構想発表会および中間発表会での発表ならびに口述試験は、研究科の専任教員が参加する場で行われ、それぞれの発</p>	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

表会、試験終了後に、全教員で個々の研究の水準をチェックしている。こうした専任教員全員による議論が学位の水準維持につながっている。

【博士】

構想発表会および中間発表会での発表は全専任教員が参加する場で行われ、発表会終了後に、全教員で個々の研究の水準をチェックしている。

【2018年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

2019年度以降の博士課程入学生については、3段階のステップごとに設定された研究課題について主指導教員・副指導教員が達成度をチェックするとともに、この研究課題に関する発表を全教員で評価することで、学位のさらなる水準維持を図ることになっている。

(注：2019年度入学者がいないため、現状ではまだ実施されていません)

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし

⑤学位授与に係る責任体制及び手続を明らかにし、適切な学位の授与が行われていますか。

S A B

※責任体制及び手続等の概要を記入。ただし、博士については、学位規則のとおりに行われている場合には概要の記入は不要とし、「学位規則のとおり」と記入。

【修士】

修士論文ならびにリサーチペーパーの口述試験（論文提出者による主旨説明 10分、主査からの試問 15分、副査からの試問 10分、その他の教員からの試問 10分）後に、研究科の専任教員で判定会議を開催し、審査規程に照らして学修の成果を判断している。

【博士】

学位規則のとおり。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし

⑥学生の就職・進学状況を研究科（専攻）単位で把握していますか。

はい いいえ

※データの把握主体・把握方法、データの種類等を記入。

キャリアセンターより過去3年度分のデータを入手し、教授会（第7回）において情報を共有した。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

・2018年度第7回教授会資料

1.4 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。

①分野の特性に応じた学習成果を測定するための指標の適切な設定または取り組みが行われていますか。

S A B

※取り組みの概要を記入。

【修士】

・研究科の3つの研究領域（「国際社会に存在する多様な地域文化間の相関関係」「多文化・多民族社会での共生」「様々なメディアが介在する情報化社会における文化交流・認識」）の基盤的な知識と方法論の修得については、修士1年次の必修科目「国際文化研究 A/B」ならびに修士2年次の必修科目「国際文化共同研究 A/B」において、各学生の成果を把握、評価している。

・質的・量的調査を通して一次資料を発掘し、その分析結果を口頭表現や文章表現、あるいは ICT 等を活用して論理的に伝えることができる能力については、構想発表会ならびに中間発表会に全ての専任教員が参加し、学習成果を把握、評価している。

・異文化間で生じる課題に対して、既存文献や先行事例を体系的に理解した上で批判的に評価する能力、ならびに異文化間の理解や交流に関わる研究の知を現実の問題発見や実務的な問題解決に結びつけて実践知とする能力の修得については、構想発表会ならびに中間発表会に全ての専任教員が参加し、異なる学問分野の知見から学際的に学習成果を把握、評価している。

・上記に加え、修士論文やリサーチペーパーの口述試験後、研究科の専任教員で判定会議を開催し、審査規程に照らして学修の成果を判断している。

【博士】

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

<ul style="list-style-type: none"> ・研究科の3つの研究領域である「異文化相関関係研究」「多文化共生研究」「多文化情報空間研究」の専門性を高めるため、「博士論文演習」に加え、研究科所属の全教員が参加しての「博士ワークショップ」を配置し、異なる領域からの学びを深めている。 ・外国語文献を批判的に評価した上で研究成果を単著として発表できるよう「博士論文演習」を通して指導するほか、国内外の学術誌への投稿や海外での研究発表を強く奨励している。 ・将来研究者となった際の後進の指導・教育のトレーニングの場として「博士ワークショップ」において、修士課程の学生の研究に対するコメントを課すと同時に、大学院所属の留学生に対するチューターを奨励している。 ・上記に加え、論文提出年次に、主指導教員と副指導教員が審査規程に沿って学習成果を評価し、その結果を教授会で審議している。 	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特になし 	
<p>②具体的な学習成果を把握・評価するための方法を導入または取り組みが行われていますか。</p>	<p><input checked="" type="checkbox"/> S A B</p>
<p>※取り組みの概要を記入。取り組み例：アセスメント・テスト、ルーブリックを活用した測定、学習成果の測定を目的とした学生調査、卒業生・就職先への意見聴取、習熟度達成テストや大学評価室卒業生アンケートの活用状況等。</p>	
<p>【修士】</p> <p>1年次必修科目「国際文化研究 A/B」ならびに2年次必修科目「国際文化共同研究 A/B」において、研究科の3つの領域に関する知識と方法論の修得、また調査方法や論文技法を含めた学習成果について、担当教員が把握、評価している。また、構想発表会、中間発表会、口述試験のすべてに全教員が参加し、異なる学問分野から学際的に学習成果を把握、評価している。</p>	
<p>【博士】</p> <p>論文構想発表会ならびに中間発表会に全教員が参加し、異なる学問分野から学際的に学習成果を把握している。</p>	
<p>【2018年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>2019年度以降の博士課程入学者については、以下の評価基準により、「博士ワークショップ」のステップごとの研究教育成果を把握、評価する。</p> <p>①平常点（コメント・シート）：20点（評価は研究科執行部が行う）</p> <p>②論文プロポーザル・先行研究サーベイ論文・博士論文を構成する章：80点（評価は発表会後の教員による意見交換会で行う）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・論文プロポーザル・先行研究サーベイ論文・博士論文を構成する章：40点 ・発表：40点 <p>①と②の合計点で成績評価を行ない、60点以上を合格とする（不合格の場合は再履修）。</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国際文化研究科博士後期課程ステップ制（2018年度第9回教授会資料の修正版） 	
<p>1.5 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。</p>	
<p>①学習成果を定期的に検証し、その結果をもとに教育課程及びその内容、方法の改善・向上に向けた取り組みを行っていますか。</p>	<p>S <input checked="" type="checkbox"/> A B</p>
<p>※検証体制および方法、改善・向上に向けた取り組みの概要を記入。</p>	
<p>【修士】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コースワークについては、学期ごとに後シラバスを教務委員会で検討し、その結果を教授会で議論している。 ・リサーチワークについては、構想発表会、中間発表会、国際文化情報学会といった発表の場を、時期を定めて設けることで、研究科全体として研究の進捗を確認し、次年度の科目の設定や必修科目の見直し等の検討につなげている。 	
<p>【博士】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コースワークについては、「博士ワークショップ」における成果を、研究科教授会で報告し共有している。 ・リサーチワークについては、構想発表会、中間発表会、国際文化情報学会といった発表の場を、時期を定めて設けることで、研究科全体として研究の進捗を確認し、次年度の科目の設定や必修科目の見直し等の検討につなげている。 	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2018年度第2回教授会資料、第7回教授会資料（教務委員会の後シラバスへのコメント） ・2018年度第5回教授会回覧資料（「博士ワークショップ」コメント・シート） 	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

②学生による授業改善アンケート結果を組織的に利用していますか。	S	A	B
<p>※取り組みの概要を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> 授業改善アンケートの結果を、2018年度第1回研究科教授会で共有し、改善すべき点があるかどうかの確認を行った。 必修科目の「国際文化研究 A/B」、「国際文化共同研究 A/B」の場で、担当する専任教員が学生の声を聞き、それを授業の改善に役立っている。 			
<p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> 特になし 			

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
<p>[修士]</p> <ul style="list-style-type: none"> 修士1年次に必修科目「国際文化研究 A/B」を履修することで、カリキュラム・ポリシーならびにディプロマ・ポリシーに掲げられている3つの研究領域に関する基盤的な知識や方法を修得できるようになっている。 春学期の構想発表会ならびに秋学期の中間発表会に全教員が参加し、学生の研究に関する進捗状況を把握するとともに、異なる研究分野の教員がアドバイスをを行うことで、学際的な研究に発展させていけるようになっている。 口述試験に全教員が参加し、異なる研究分野から審査を行い、学際的な評価ができるようになっている。 <p>[博士]</p> <ul style="list-style-type: none"> 博士1年次から3年次に毎年「博士ワークショップ」を履修することで、博士論文の作成に向けたリサーチワークを進めていくだけでなく、将来教育者となるための能力を育成できるようになっている。 春学期の構想発表会ならびに秋学期の中間発表会に全教員が参加し、学生の研究に関する進捗状況を把握するとともに、異なる研究分野の教員がアドバイスをを行うことで、学際的な研究に発展させていけるようになっている。 2019年度以降の入学生は「博士ワークショップ」を履修することで、段階的に博士論文の作成に向けたリサーチワークを進めていくことができるようになっている。 	<p>1-1①、1-2③ 1-4①② 1-1①、1-2③ 1-3④、1-4①② 1-3①②④⑤、 1-4①② 1-1③、1-2③ 1-4① 1-1③、1-2③ 1-3④、1-4③ 1-5① 1-1③、1-2③ 1-3④、1-4②</p>

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
<ul style="list-style-type: none"> 入試で合格者のうち、修士課程で3名（早稲田大学、一橋大学、埼玉大学への進学）、博士課程で1名（千葉大学への進学）、研修生で1名（明治大学への進学）が当研究科への入学を辞退した。入学辞退者を減らすための即効性のある対策は现阶段では見当たらないが、2019年度から少し時間をかけて研究科独自の特色をブランディングする方法について検討していく予定である。 	1-1④

2 教員・教員組織

【2019年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

2.1 教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。			
①研究科（専攻）独自のFD活動は適切に行われていますか。	S	A	B
<p>【FD活動を行なうための体制】※箇条書きで記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> FD委員会 研究科執行部 <p>【2018年度のFD活動の実績（開催日、場所、テーマ、内容（概要）、参加人数等）】※箇条書きで記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> 新入生オリエンテーションにおいて、研究科教員紹介冊子に基づき、各教員が専門分野ならびに担当科目の紹介を行った（新入生オリエンテーション：4月4日、大学院棟202教室、約50名）。 			

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

<ul style="list-style-type: none"> ・後シラバスに基づいた議論を教授会の中で春学期・秋学期各1回行った（第2回研究科教授会、5月22日、BT25階C会議室、13名：第7回研究科教授会、11月13日、BT25階C会議室、11名）。 	
<p>【2018年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>2018年度は研究科専任教員の研究発表会を3回開催した。うち一回は新任教員によるものである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・岩川ありさ先生、論文「変わり身せよ、無名のもの—多和田葉子『献灯使』論」を中心とする研究発表会（5月22日、BT25階C会議室、20名） ・佐々木一恵先生「20世紀転換期のニューヨークのジェントリー改革者（gentry reformers）と宗教・ジェンダー・公共領域」（7月24日、BT25階C会議室、12名） ・曾士才先生「日中戦争の記憶と記録—神戸の華僑学校教職員の事例」（12月11日、BT25階C会議室、8名） 	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究発表会レジュメ。 	
②研究活動や社会貢献等の諸活動の活性化や資質向上を図るための方策を講じていますか。	S A B
<p>※取り組みの概要を記入。</p> <p>基盤学部の国際文化学部とともに国際文化情報学会を構成する研究科として、学会費を使ったオープンセミナーを企画し、大学院生にも参加を推奨している。</p>	
<p>【2018年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>2018年度は、研究科のFD委員会が半年がかりで企画した一般公開セミナー「越境とエクソフォニーのいま～多和田葉子氏×リービ英雄氏対談」を10月31日にスカイホールで開催した。120名を超える来場者を得て盛会となった。</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・栗飯原文子、岩川ありさ「FICオープンセミナー報告：越境とエクソフォニーの今」『異文化』第20号、2019年。 ・多和田葉子+リービ英雄（対談）「越境とエクソフォニーの今」、『すばる』2019年1月号。 	

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
<ul style="list-style-type: none"> ・研究科の専任教員による研究発表会を開催している。この研究発表会には教員だけでなく大学院生も参加し、教員のFD活動の推進ならびに研究科全体の研究活動の活性化につながる取り組みとなっている。 	2-1①
<ul style="list-style-type: none"> ・研究科の特色や独自性を活かした一般公開セミナーを開催し、社会貢献に努めるとともに、研究科の対外的なアピールを図っている。 	2-1②

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
<ul style="list-style-type: none"> ・研究科の教員は学部と兼任の状態にある。また基盤学部の国際文化学部の教員は学部以外の教学組織の運営にも関わることが多く、大学院を含めると3つの教学組織に所属している教員が大半である。そのため、研究科の専任教員の研究やFD活動を活性化させていくためには、事務作業の軽減や効率化を図る必要がある。 	2-1①②

III 2018年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	理念・目的					
1	中期目標	研究科の教育目標に掲げられている、マルチカルチュラルな人材育成とインターカルチュラルに活躍する高度職業人及び研究者の養成について、具体的な像ならびに養成の方法に関する議論を行う。					
	年度目標	養成を目指す人材の具体的像を描くための議論を行う。					
	達成指標	教授会において、教育目標で掲げる人材の具体的像に関する検討を1回は行う。					
	年度末報告	<table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="2">教授会執行部による点検・評価</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>自己評価</td> <td>A</td> </tr> <tr> <td>理由</td> <td>第4、5回教授会において、教育目標に掲げる人材像について、現状の分析を含めた意見交換を行った。</td> </tr> </tbody> </table>	教授会執行部による点検・評価		自己評価	A	理由
教授会執行部による点検・評価							
自己評価	A						
理由	第4、5回教授会において、教育目標に掲げる人材像について、現状の分析を含めた意見交換を行った。						

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

		改善策	教育目標に掲げる人材像は修了後の進路とも密接に関わることから、来年度は修了後の進路と連動させた形で議論を行い、養成を目指す人材像をより明確化していく。
		質保証委員会による点検・評価	
		所見	国際文化という学際研究における専門性の問題、学部との連携を視野に入れた出口の可能性など、人材育成の方法について意見交換を行った。
		改善のための提言	修了生の進路状況だけでなく、本研究科の入学や受験生のニーズ、進路希望も踏まえつつ、養成を目指す人材像に関する議論を深める。
No		評価基準	内部質保証
2	年度末報告	中期目標	教員の教育能力の向上の取り組みの一環として、教員の研究活動の促進を図る。
		年度目標	①教員紹介冊子に掲載する教員の研究活動内容を最近の研究に絞った内容に改訂する。 ②教員の研究発表会を開催する。
		達成指標	①教員紹介冊子に掲載される研究業績が過去10年に発表されたものに限定されたリストに改訂されている。 ②教員の研究発表会を1回は実施する。
		教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	①教員紹介冊子に掲載する教員の研究業績を過去10年間に発表したものとし、冊子を改訂した。 ②教員の研究発表会を3回（5月22日、7月24日、12月11日）実施した。
		改善策	研究科のさらなる研究・教育活動の活性化を図るために、研究発表会を学内にオープンな形で開催するなど、様々な可能性を模索する。
	質保証委員会による点検・評価		
		所見	教員の研究活動の刺激となり、引いては教育能力の向上に繋がる年度目標①、②ともに達成できたことは評価できる。今後継続していくことが望ましい。
		改善のための提言	教員の研究発表会をFICセミナーの一環として実施し、国際文化情報学会に所属する教員、学生への周知徹底を図る手立てを工夫する。 研究成果の刊行を視野に入れて教員の研究発表や研究科単位での競争的資金獲得を目指す。
No		評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】
3	年度末報告	中期目標	学生のニーズに即した学部・大学院の相互連携を、基盤学部である国際文化学部と協力しながら推進する。
		年度目標	大学院に進学した際に、学部生の時に履修した大学院科目が、所要取得単位に組み込まれる「先取り科目」履修制度の導入に向けた検討を行う。
		達成指標	他大学・他学部の事例分析ならびに履修制度に関する議論を教授会において2回程度実施する。また学部執行部と研究科執行部の合同会議を1回は実施する。
		教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	第4、5回教授会での検討を経て、人文科学研究科が既に実施している「学部生の大学院科目履修」制度を、2019年度より本研究科でも導入することを決定した。また、学部執行部とも9月25日に打ち合わせを行った。
		改善策	3年次以降の学部生に対して「学部生の大学院科目履修」制度の周知を行い、学部生に大学院科目の履修を促すことで、学部と大学院の相互連携を促進していく。
	質保証委員会による点検・評価		
		所見	学部・大学院の相互連携の一環として、本制度ができ、3月の演習説明会で新3年生への周知を図り、本制度が実際に活用されるようにしている。
		改善のための提言	大学院担当教員の研究発表会への学生の参加を促すことで、大学院の授業科目に関心を持ってもらう。ゼミだけではなく、2年生履修ガイダンスなどの場を利用して、早い段階から本制度の周知を図る。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】	
4	中期目標	①修士論文やリサーチ・ペーパーの研究を進めていく上で必要な基本的な知識・概念・方法論を身につけていない学生を対象とするリメディアル教育方法の策定を行う。 ②修士課程1年次必修科目「国際文化研究」ならびに2年次必修科目「国際文化共同研究」の効果的な実施をさらに促進する。	
	年度目標	①修士課程の学生が学部の授業を履修する方法の検討を行う。 ②「国際文化研究」では文献の輪読とディスカッションに加え、学生の研究テーマの構築の手助けとなる取り組みを導入する。「国際文化共同研究」では学生の研究に対しより多角的な視点からコメントを行う取り組みを導入する。	
	達成指標	①他研究科の事例分析ならびに履修方法に関する議論を教授会において2回程度実施する。また学部執行部と研究科執行部の合同会議を1回は実施する。 ②「国際文化研究」では、各学生が1回は研究テーマの構想に関する発表を実施する。「国際文化共同研究」では、博士後期課程の学生による、修士課程2年次の学生の発表に対するコメント並びにフィードバック・レポートを実施する。	
		教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	①リメディアル教育の方法について、第7、8回教授会で議論を行った。また、学部執行部とも9月25日に意見交換を行った。その結果、修士論文やリサーチ・ペーパーの研究を進めていく上で必要となる知識・概念・方法論を身につけていくための一つの方法として、首都圏大学院コンソーシアムを積極的に利用していくことになった。 ②「国際文化研究」では、各学生が研究テーマの構想を発表し、研究の方向性、方法論について議論・検討を行った。「国際文化共同研究」では、春学期に博士後期課程の学生が討議者として授業に参加し、修士2年次の学生の研究発表に対してコメントを行い、それらをレポートとして提出した。
	年度末報告	改善策	①新入生オリエンテーションにおいて、首都圏大学院コンソーシアムの紹介を行い、他研究科の科目履修と併せて、修士論文やリサーチ・ペーパーの研究に必要な知識・概念・方法論を身につけられるよう指導する。 ②修士論文・リサーチペーパー作成に向けた土台作りを目的に、「国際文化研究A」ではリサーチ・デザイン（トピックの選び方、先行研究分析、リサーチ、タイム・マネージメント、等を含む）や研究のための基礎的な方法論（言説（資料・史料）分析、フィールドワーク、統計調査、等）の紹介を行う。
		質保証委員会による点検・評価	
		所見	近年、学部時代と異なる研究テーマで研究する学生（特に留学生）が増加しており、首都圏大学院コンソーシアム加盟校の開講科目を活用したリメディアル教育は一定の効果が期待できる。 修士1、2年次の必修科目「国際文化研究」「国際文化共同研究」の教学内容を明確化したことにより、大学院における教育課程の体系化と学習効果の向上が期待できる。
		改善のための提言	リメディアル教育においては、指導教員と充分に相談して履修科目選びをすることが肝要である。場合によっては、単位とは関係なく、学部の授業の聴講も検討する必要があるかもしれない。
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】	
5	中期目標	①リサーチ・ペーパーの内容をより明確化し、リサーチ・ペーパーの教育効果の実質化を図る。 ②学位授与方針ならびに学位論文審査規程に則り、より慎重かつ厳正な学位論文の審査の実施を図る。	
	年度目標	①リサーチ・ペーパーの内容面における概要を、他大学の事例などを参考に、国際文化研究科に相応しい形態を検討する。 ②各教員が学位授与方針を熟知し、審査規程に沿って、修士論文ならびに博士論文の評価	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

		を行う。
	達成指標	①教授会等における議論を2回程度実施し、修士論文とリサーチ・ペーパーの内容面での違いを新入生オリエンテーション資料に記載する。 ②修士論文口述試験後の検討会議ならびに教授会における博士論文審査において、学位授与方針と学位論文審査規程を教員全員で再度確認した上で、慎重かつ厳正に学位論文の審査を実施する。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	①第4、5、6回教授会で議論を行い、リサーチ・ペーパーの具体的な概要を策定し、その内容に沿った形でリサーチ・ペーパー規程の改定を行った。また、リサーチ・ペーパーの概要を新入生オリエンテーションの資料に記載した。 ②修士論文口述試験、ならびに教授会における博士論文審査で、学位授与方針と学位論文審査規程に基づき、慎重かつ厳正に審査を実施した。
	改善策	①新規規程に則った形のリサーチ・ペーパーを選択した学生に対しては、リサーチ・ペーパーの趣旨と概要に沿った形で研究が進められるよう、研究科全体でサポートしていく。 ②大学院学則第27条「最終試験は、博士論文を中心とし、これに関連する学問領域について行い、その中には1か国以上の外国語の能力を考査する試験を含むものとする。」を踏まえて、研究科として博士論文審査をどのように実施していくのかを検討する。
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	リサーチペーパーの性格（研究サーベイ論文／提言論文）と審査基準を明確化し、修士論文との違いをクリアにすることができた。 修士論文審査規程や学位論文審査規程に基づき、公開審査形式で慎重かつ厳正に審査を行った。
	改善のための提言	リサーチペーパーの審査基準を明確にしたことで、学生の研究動向にどう影響を与えるかを追跡調査する必要がある。
No	評価基準	学生の受け入れ
6	中期目標	基盤学部である国際文化学部からの進学者の増加を図る。
	年度目標	国際文化学部の新3年生に大学院への進学に関心を持ってもらう取り組みを行う。
	達成指標	大学院担当教員が国際文化学部の演習説明会において国際文化研究科に関する説明を実施する。
	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	演習説明会において、「学部生による大学院科目履修」制度の説明など、大学院に関する説明を実施した。（注：これからやります。）
	改善策	来年度以降の研究科長会議で検討が予定されている学部と大学院の連携についての議論と連動させながら、学部からの進学者の増加につながる取り組みや可能性を研究科として検討する。
質保証委員会による点検・評価		
所見	3月の演習説明会で、学部生が受講可能な「大学院科目」のリストを配布し、新3年生向けに説明できた。	
改善のための提言	学部生に大学院での学びや開講科目について関心を持ってもらうよう、情報提供の機会をもっと増やす。	
No	評価基準	教員・教員組織
7	中期目標	①大学院を担当している教員の退任にあたっては、専任教員の新規採用を行う基盤学部の国際文化学部に要望を申し入れ、国際文化研究科側のニーズが反映された採用を図る。 ②研究科内のFD活動の活性化を図る。
	年度目標	①国際文化研究科のニーズに沿った専任教員を1名迎え入れる。 ②FD活動の一環として教員の研究発表会を開催する。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

	達成指標	①研究科のニーズに沿った専任教員を1名迎え入れた状態になる。 ②教員の研究発表会を1回は実施する。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	①日本現代文学、クィア・スタディーズ、サブカルチャー研究を専門とする専任教員を1名迎え入れた。 ②教員の研究発表会を3回(5月22日、7月24日、12月11日)実施した。
	改善策	①来年度の採用人事において、国際文化学部国際文化研究科の要望を申し入れ、研究科のニーズが反映された採用となるよう試みる。 ②教員の研究発表会を継続的に実施していく。
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	研究科のニーズに沿った新任教員を採用できたこと、教員の自主的なFD活動が実現したことは評価できる。
	改善のための提言	学部で設置される人事選考委員会との意思疎通を緊密に図り、基盤学部との連携を強化する。
No	評価基準	学生支援
8	中期目標	外国人留学生に対する修学支援をさらに推進する。
	年度目標	1年次の「国際文化研究日本語演習A/B」に加え、2年次春学期の「国際文化研究日本語演習C」の導入に向けた検討を行う。
	達成指標	2019年度に「国際文化研究日本語演習C」を新設する。
	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	2019年度より、「国際文化研究日本語演習C」(2年次春学期に履修)が開講されることになった。
	改善策	日本語相談室や日本語チューター制度の積極的な利用を勧奨していく。
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	主査、副査の教員による指導に加えて、研究科独自の学術的日本語力の指導、向上を図る態勢が強化された。
	改善のための提言	論文指導教員、日本語演習、日本語相談室、日本語チューターなどを有機的に活用し、修士課程を通じた留学生に対する一貫支援体制が有効に機能するかどうかの検証を行う。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
9	中期目標	国際文化研究科の理念・目的に沿った社会貢献・社会連携の実施に向けた取り組みを図る。
	年度目標	①国際文化研究科として望ましい社会貢献・社会連携の在り方を教授会等で検討する。 ②社会貢献・社会連携の一環として、国際文化研究科の理念・目的に沿った一般公開セミナーを開催する。
	達成指標	①教授会における議論を2回程度実施する。 ②一般公開セミナーを1回は実施する。
	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	S
	理由	①第2回教授会において議論を行った。 ②10月31日に、「越境とエクソフォニーのいま～多和田葉子氏×リービ英雄氏対談」と題して、一般公開セミナーを開催した。120名を超える来場者があり、盛会となった。
	改善策	継続的に研究科教授会で議論を行うとともに、来年度以降に関しても、研究科の理念・目的に沿った一般公開セミナーの開催を試みる。
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	このような大規模な公開セミナーは、国際文化専攻設置時に開催したシンポジウム以来であり、対外的にも本研究科の理念・目的をアピールできた。
	改善のための提言	研究科教員の研究、教育の成果を公開シンポジウムや刊行物で社会に対し還元する仕組み

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

	の提言	を検討していくべきである。
<p>【重点目標】 学生支援 研究科において重要な課題となっている、留学生の日本語教育として、2年次春学期の「国際文化研究日本語演習C」の開設を重点目標とする。具体的には、学則改正の締切（2019年1月9日）に間に合うよう、現在休講扱いとなっているコマを原資に「国際文化研究日本語演習C」を開設する作業を進める。</p>		
<p>【年度目標達成状況総括】 これまで研究科の課題の一つであった学部と大学院の連携の一環として、学部生による大学院科目の履修制度を2019年度から導入することになった。また、2年次留学生を対象とする日本語科目の2019年度からの開講、リサーチ・ペーパー規程の改定、博士コースワークへのステップ制の導入を通じて、修士課程・博士課程の教育内容のさらなる充実化を図った。加えて今年度から、新たな試みとして教員研究発表会を実施、また研究科の理念・目的に沿った一般公開セミナーを開催するなど、FDならびに社会貢献活動にも力を入れた。</p>		

IV 2019年度中期目標・年度目標

No	評価基準	理念・目的
1	中期目標	研究科の教育目標に掲げられている、マルチカルチュラルな人材育成とインターカルチュラルに活躍する高度職業人及び研究者の養成について、具体的な像ならびに養成の方法に関する議論を行う。
	年度目標	養成を目指す人材像を検討するために、本研究科の入学者や受験者のニーズや進路希望を把握する。
	達成指標	本研究科の入学者や受験者のニーズや進路希望を把握する方法について教授会で議論し、その方法に沿った形で調査を行い、結果について教授会で検討する。
No	評価基準	内部質保証
2	中期目標	教員の教育能力の向上の取り組みの一環として、教員の研究活動の促進を図る。
	年度目標	研究科の専任教員の研究発表会を、国際文化情報学会に所属する教員と学生が参加するFICオープンセミナーとして実施する。
	達成指標	FICオープンセミナーとして研究科の専任教員の研究発表会を2回以上開催する。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】
3	中期目標	学生のニーズに即した学部・大学院の相互連携を、基盤学部である国際文化学部と協力しながら推進する。
	年度目標	今年度から導入されている「学部生による大学院科目履修」制度への学生の関心を促すとともに、学部生の受講状況を確認し、必要に応じて対策を検討する。
	達成指標	・学部生に授業内容がわかりやすいよう、大学院の授業科目の一部にサブタイトルをつけ、シラバスにも反映されるようにする。 ・学部生の受講状況を教授会で共有し、必要に応じて対策を議論する。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】
4	中期目標	①修士論文やリサーチペーパーの研究を進めていく上で必要な基本的な知識・概念・方法論を身につけていない学生を対象とするリメディアル教育方法の策定を行う。 ②修士課程1年次必修科目「国際文化研究」ならびに2年次必修科目「国際文化共同研究」の効果的な実施をさらに促進する。
	年度目標	①リメディアル教育の一環として、首都圏大学院コンソーシアムの利用を推奨する。 ②修士論文・リサーチペーパー作成に向けた土台作りを目的に、「国際文化研究A」においてリサーチ・デザインや研究のための基礎的な方法論の紹介を行う。
	達成指標	①新入生オリエンテーションにおいて、首都圏大学院コンソーシアムの紹介を行い、修士論文やリサーチ・ペーパーの研究に必要な知識・概念・方法論を身につけられるよう指導。 ②「国際文化研究A」において、リサーチ・デザイン（トピックの選び方、先行研究分析、リサーチ、タイム・マネージメント、等を含む）や研究のための基礎的な方法論（言説（資料・史料）分析、フィールドワーク、統計調査、等）の紹介を行う。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
5	中期目標	①リサーチ・ペーパーの内容をより明確化し、リサーチ・ペーパーの教育効果の実質化を図る。 ②研究の主たる対象の調査や分析において必要な外国語（母語以外）の運用能力の育成を図る。
	年度目標	①リサーチペーパーの内容をより明確化したことで、学生の研究動向にどのような影響があるか追跡調査を行う。また、「研究サーベイ論文」もしくは「提言論文」を選択した学生に対するサポートを行う。 ②国際文化学部外国語アプリケーション科目（上級レベル）の履修に向けた検討を行う。
	達成指標	①リサーチペーパーを選択した学生については、指導教員と学生の双方に、選択の理由等についてヒアリングを行う。また、リサーチペーパー（「研究サーベイ論文」もしくは「提言論文」）を選択した学生に対して、リサーチペーパーの主旨と概要に沿った形で研究が進められるよう、主指導教員・副指導教員を中心にサポートを行う。 ②教授会において外国語の運用能力の育成に関する議論を行うとともに、学部アプリケーション科目の履修に関して、学部執行部と意見交換を行う。
No	評価基準	学生の受け入れ
6	中期目標	①基盤学部である国際文化学部からの進学者の増加を図る。 ②博士課程への進学者の増加を図る。
	年度目標	①学部生に大学院での学びや開講科目について関心を持ってもらうよう、情報提供の機会を増やす。 ②教員の研究活動とリンクする形で、研究科の特色や独自性を打ち出すブランディングの検討を行う。
	達成指標	①国際文化学部 Web ページに大学院科目の履修案内を掲載する。また、学部生のための大学院授業参観ウィークを開催する。 ②教授会において議論を行う。また、研究科のブランディングにつながるテーマで勉強会を行ったり、公開セミナーを開催する。
No	評価基準	教員・教員組織
7	中期目標	大学院を担当している教員の退任にあたっては、専任教員の新規採用を行う基盤学部の国際文化学部必要を申し入れ、国際文化研究科側のニーズが反映された採用を図る。
	年度目標	後任人事において、研究科のニーズが反映された採用を図る。
	達成指標	教授会において、後任人事に関する研究科のニーズを議論し、その内容を新規採用を行う国際文化学部へ申し入れる。
No	評価基準	学生支援
8	中期目標	外国人留学生に対する修学支援をさらに推進する。
	年度目標	修士課程を通じた、留学生に対する日本語支援体制が有効に機能しているか検証を行う。
	達成指標	「国際文化研究日本語論文演習 A/B/C」の履修状況ならびに日本語相談室や日本語チューターの利用状況等から、留学生に対する日本語支援体制が機能しているか、教授会で検証する。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
9	中期目標	国際文化研究科の理念・目的に沿った社会貢献・社会連携の実施に向けた取り組みを図る。
	年度目標	国際文化研究科の理念・目的に沿った一般公開セミナーを開催する。
	達成指標	一般公開セミナーを1回は開催する。
【重点目標】 博士課程への進学者の増加を図ることを重点目標とする。現段階では直接的かつ即効性のある対策は見当たらないが、今年度は研究科の特色あるブランディングを策定していくための作業を行う。具体的には、FIC オープンセミナーとして教員の研究発表会の開催、ブランディングにつながるテーマに関する勉強会の実施、研究科の特色を活かした一般公開セミナーの開催を行う。		

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

V 大学評価報告書

2018年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価
国際文化研究科では、自己点検・評価シートに説明な不十分な箇所があるとの指摘を受け、今年度は各項目に対し詳細な記述がなされている。また、学部と研究科を兼任している教員の負担が問題として挙げられていたが、負担の軽減を実現するために、国際文化学部との連携を強めたことが記されており、改善への努力が認められる。
1 教育課程・学習成果の評価
①教育課程・教育内容に関すること
国際文化研究科修士課程では、修士1年次に研究の基礎を学ぶ必修科目、2年次は論文執筆の手法を学ぶ必修科目があり、コースワークとリサーチワークが適切に組み合わせられている。博士後期課程においては、コースワークとリサーチワークの区別が難しいが、新規に開講された「博士ワークショップ」はコースワークとしてもリサーチワークとしても、段階的に研究の進捗を確認できるという意味で博士後期課程の教育に相応しい。修士課程・博士後期課程ともに、一つの領域に偏らず、専門分野の高度化に対応した「異文化相関関係研究」「多文化共生研究」「多文化情報空間研究」の三領域の専任教員から研究の示唆・指導を受けられることは評価できる。 「Thesis Writing A/B」と「Oral Presentation」の設置、留学生を対象とした「日本語論文演習C」の開講は、研究科の今後のグローバル化にもつながるものであり評価できる。
②教育方法に関すること
国際文化研究科修士課程・博士後期課程ともに、新入生オリエンテーションや各授業の冒頭、主指導教員との個別面談などで、個人の関心にあった履修指導が行われている。2018年度に学位取得のためのガイドラインを作成し、学生に配布したことは評価できる。学位論文指導は主指導教員・副指導教員の他、修士課程の学生においては必修科目内で専任教員と博士後期課程の修了生である兼任教員が適時行っている。また年二回の発表会では全教員が研究の進捗状況を確認し、質疑・コメントをしている。発表会後の評価会議で共有された指導方針については適切に学生にフィードバックされている。学生が異なる分野の複数の教員から指導を受けられる体制が整っていることは高く評価できる。
③学習成果・教育改善に関すること
国際文化研究科では、成績評価、論文の可否判定ともに明確な手続きが定められており、適切に行われている。学位授与の手続きも適切である。学習成果の評価は、主にコースワークおよび年二回の発表会にて評価している。いずれも複数名の教員（発表会においては全教員）が評価に加わっており、学位水準を保つことにも役立っている。博士後期課程の「博士ワークショップ」では2019年度より点数の配分が明確化され、学習成果のより客観的な把握にむけた試みとして評価できる。教育課程及びその内容・方法の向上は、他大学の研究科に対する競争力を高める上でも重要なので、研究科内で議論するとどまらず、学外の基準とも照らし合わせて検証するなどの取り組みが望まれる。アンケートの組織的活用については、授業改善アンケートの結果を教授会で共有・確認しているほか、必修科目2科目で、専任教員が学生の声を聞いて、授業改善に役立っている。
2 教員・教員組織の評価
国際文化研究科では、後シラバスに基づいた議論が年二回行われているほか、研究科専任教員の研究発表会も三回開催されており、FD活動は適切に行われていると言える。また、国際文化情報学会の活動の一環としてオープンセミナーを企画し、学内外から多くの参加者を集め成功させたことは、社会貢献の観点から高く評価できる。
2018年度目標の達成状況に関する所見
2018年度は、学部生による大学院科目の履修制度、留学生を対象にした日本語科目の開講、リサーチペーパーの規定の明確化、「博士ワークショップ」の開講など、教育課程を充実させるための試みが複数見られており、高く評価できる。教員の研究活動を促進し、また若手の新任教員を迎え入れるなどして、研究科全体の活性化を図っている。リメディアル教育の方法として、首都圏大学院コンソーシアムの利用を決定している。これらの試みの成果が期待される。
2019年度中期・年度目標に関する所見
国際文化研究科の活性化に向けて、適切な年度目標を設定している。学部と研究科の連携を強め、国際文化学部の学生が研究科の授業に興味をもつような具体的な工夫（シラバスやWEBページへの大学院科目の記載、大学院授業参観ウィークの実施など）が記されており、また教員の研究発表の場を設けることで、研究科のブランディングを行い、重点目標である進学者数の増加を目指すとしている。さらに、留学生やリメディアル教育が必要な学生へのサポートが十分に提供されるよう対策が取られており、これらが実際に機能しているか確認することを課題としており、適切である。
法令要件及びその他基礎的要件等の遵守状況
特になし

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

総評

国際文化研究科の教員の多くは、学部と研究科、その他教学組織の運営を兼任で行っているのにも関わらず、研究科の改善に精力的に取り組んでいることがうかがえ、高く評価できる。学部との連携、博士後期課程のコースワークの充実のための「博士ワークショップ」開講、留学生のための「日本語論文演習」の開講、学位取得のためのガイドラインの明文化、専任教員による研究発表会、一般公開セミナーなど限られたリソースを最大限に生かした取り組みがなされてきた。

2019年度は研究科のブランディングが年度目標にも設定されており、教育内容の充実と共により多くの入学者を惹きつける研究科に発展することが期待される。同時に前年度に引き続き、事務作業の軽減化や効率化を実現するため、継続的な対応を期待したい。また、入学辞退者の低減や学部生に向けた情報発信の取り組みが始まっており、今後を期待したい。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。